



ほうさ 第19号

1984年7月
名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hōsabunko

展示屋 よ り

尾張の祭礼と風俗

7.21(土)~8.19(日)

江戸中期、尾張藩士であり、画家としても知られた内藤東甫が著わした尾張の地誌「張州雑志」には、名古屋東照宮はじめ熱田・津島など当時の尾張の代表的な祭礼の様子が、肉筆の彩色画によって生き生きと描かれている。特に、祭りを見物する人々の表情や動作には、昔も今も変わらぬ祭りに対する人々の心情が表現されているように思われる。

祭礼が、庶民を主人公に各地で華やかに行なわれるようになるのは江戸時代以降のことである。町々は疫病除災を、村々は豊作・豊漁を願って華やかな供宴を競い、再三の禁令にもかかわらず、祭礼は豪華になる一方であった。

尾張には、古い歴史をもつ神社や祭礼も多いが、江戸時代の尾張を象徴する祭りに東照宮の祭礼が



名古屋名所団扇絵集
(柳薬師夜開帳)



同(天王崎祭礼)

あり、単に「御祭礼」といえば、これを意味するほどであった。東照宮は、元和5年(1619)尾張藩初代藩主義直により、東照大権現徳川家康を祀る神社として名古屋城三の丸に造営された。祭礼は、毎年4月15日から17日まで行なわれ、この時には、城下の町人にも参詣が許されたことから、各町方から山車や行列を出すようになったという。家康の忌日にあたる17日には、神輿を守る行列が城内の東照宮から末広町(現市内中区)の御旅所までを往復し、町奉行所の行列を先頭に各町が趣向を競う山車や行列が続いた。7代藩主宗春の時代には、行列の参加者数千人といわれるほど華やかになり、元文4年(1739)宗春の蟄居謹慎とともに一旦は行列の人数を半減するが、ふたたび隆盛に向かい、天保期には絶頂に達したという。祭りの山車は、名古屋の町衆の富と力を示すものとして作られ、からくり人形や^{さい}庵振り人形が飾られた。その形は、近隣の祭礼にも影響を与え、現在尾張各地に見られる山車は、東照宮祭礼に始まるといわれる。

毎年6月15日には、京都の祇園祭りの影響で、全国で祇園祭り、天王祭りが行なわれた。尾張では6月14・15日を中心に3ヶ月にわたって行なわれる津島神社の祭礼を初め、名古屋の亀尾天王社(現那古野神社)、若宮八幡社、広井天王(現洲崎神社)などで祭礼が催された。15日の津島の宵祭りには車楽(巻藁船)が500余の提灯を飾って天王川を遡り、華麗な祭礼絵巻を展開した。

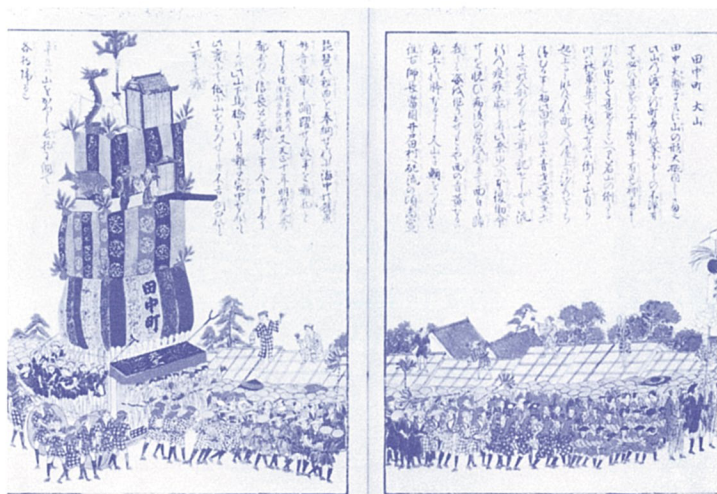
熱田では、年間70余の神事が行なわれており、その様子は「熱田祭奠年中行事図会」に詳しいが、毎年6月の大山祭には、高さ12間(約22m)に及ぶ大山車が登場した。裸祭りで知られる国府宮の儼追神事は、幕末まで古式を保って行なわれ、3月3日の尾張一宮、真清田神社の桃花会には、美しく飾られた馬の塔も登場した。このほか奇祭といわれる七所社(現市内中村区)の杵こさ祭り、豪華な

山車を干潮の海へ曳きおろす亀崎村神前神社(現半田市)の祭礼等々、多くの祭礼が各地で行なわれていたのである。

今回の展示においては、「張州雑志」「熱田祭奠年中行事図会」「尾張名所図会」、さらに「名古屋名所団扇絵集」(名古屋市博物館蔵)など、絵画を中心に江戸時代の祭礼の様子を見ていただくのが趣旨である。ただし、ほとんどが冊子本の形に綴じられているため、それぞれの一部しかお見せできないのが心残りである。



張州雑志(巻1 虫供養之図)



熱田祭奠年中行事図会(田中町 大山)

「尾張の祭礼と風俗」出品目録

〈熱田〉

1. 張州雑誌
内藤東甫
江戸中期写（自筆本） 100巻100冊
巻51～53 熱田宮年中行事
2. 尾張名所図会（前編）
岡田啓・野口道直編 小田切春江等画
天保15年刊 7巻7冊
巻3 的射の神事 端午馬の塔
3. 小治田真清水〔尾張名所図会附録〕
岡田啓著 若山善三郎編
昭和5～8年刊 8巻6冊
巻2 三ヶ浦神葭祭
4. 熱田祭奠年中行事図会
江戸末期写 10冊

〈津島〉

5. 張州雑誌
巻70～72 津島年中行事
巻75 津島町中堂社年中行事
6. 津島踊記
真野時繩著 堀田知之補記
江戸中期写（知之筆） 1冊
7. 津島祭礼之図
昭和15年刊 1軸

〈尾張北西部〉

8. 張州雑誌
巻63 真清探桃集（佐分利清円著）
9. 尾張名所図会（後編）
岡田啓・野口道直編 小田切春江等画
明治13年刊 6巻6冊
巻1 一之宮馬の頭 桃花会
巻2 僊追捕神事 夜僊追の神事
10. 尾張名所図会（前編）
巻5 七社明神田祭
11. 尾張年中行事絵抄 秋之部
高力種信（猿猴庵） 写 1冊

〈名古屋〉

12. 張州雑誌
巻20～23 東照宮祭礼
13. 尾張名所図会（前編）
巻1 御祭礼全図

14. 御祭礼全書
写（小寺玉晃筆） 1冊
15. 名古屋名所団扇絵集
森 玉遷画
江戸末期刊（昭和9年複製） 22枚
若宮祇園祭礼
榎権現祭礼
片端檀尻車朝祭
天王崎祭礼
廣井八幡祭礼
枇杷島祭礼

〈知多郡〉

16. 張州雑誌
巻1 虫供養之図
巻6 大坊柱祭之図
巻12 羽豆神社祭礼
巻15 日間賀島正月の神事
17. 尾張名所図会（前編）
巻6 虫供養
18. 小治田真清水〔尾張名所図会附録〕
巻4 亀崎神明の祭礼

〈社寺門前の風俗〉

19. 名古屋名所団扇絵集
桜天神植木市
柳薬師開帳
天道山開帳
20. 張州雑誌
巻50 初市
巻73 津島市
21. 尾張名所図会（前編）
巻4 源太夫社初市
22. 尾張名所図会（後編）
巻7 甚目寺初観音詣 社家町団扇出店
23. 開帳談話
高力種信 写（自筆本） 1冊
24. 青窓紀聞
水野正信編 江戸末期写 204冊
第10 文政13年おかげまいり
第179 慶応3年ええじゃないか

蓬左文庫の蔵書印

その15.「越国文庫」印

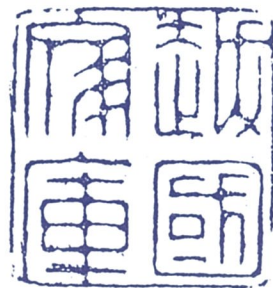
織 茂 三 郎

「越国文庫」印は、徳川「御家門」の一つで、「御三家」や「御三卿」に次ぐ家格とされる越前松平家の蔵書印とみられる。

「越国」は、本来、越前・越中・越後の三カ国にわたる総称で、加賀・能登を除く北陸道の大部分を占める広い地域であるが、江戸時代の越後は多くの中・小藩が分立し、越中は主として加賀前田家の支領に属するから、「越国」を代表すると

なれば、越前の中心福井を含む過半を領有する三十二万石の大藩・越前松平家が最もこれにふさわしい。この越前家の祖は、家康の次男結城秀康で、関ヶ原の役後、北庄（福井）に封ぜられて七十五万石を与えられたが、嗣子忠直に非行があったため、三十二万石に減額された。しかし、越前福井が古来北国の要衝として重きをなしたことは変りがなく、幕末には松平春嶽のような英主を出して、幕政に参画し、政事総裁の重職に任命されたこともある。

さて、この蔵書印はタテ37mmヨコ35mmの、四隅にやや丸みを帯びた方形印で、蓬左文庫の蔵書中では比較的新しい「秘本玉くしげ」（本居宣長著）や「慶応四年御国分武鑑」などに捺されているが、材質等は明らかでない。ちなみに、春嶽は、これも幕末の尾張藩主慶勝とはとくに親しく、共に公武合体論を唱えたが、結局は勤王派に傾かざるをえなかった。なお、尾州家十九世の徳川義親氏は春嶽の五男にあたり、慶勝の養嗣子義礼（水戸の分家旧高松松平家の出身）の養子に迎えられたという縁故もあり、さらに尾州家の十三世慶威も春嶽の弟であったが十四歳で早世したため、そのあとを尾州の分家高須松平家の慶恕（後の慶勝）が継ぐなど、この間の関係は複雑を極めるが、いずれにせよ尾・越両家の関係はいろいろの意味で密接なものがある。なお、越前家の旧蔵書は、現在、福井県立博物館に「松平文庫」として寄託されている。



「越国文庫」印

（元蓬左文庫調査研究員）

次回展示は

東洋の古活字本展

I. 9 / 16(日)～10 / 17(水)

II. 10 / 20(土)～11 / 18(日)

第10回「名古屋叢書三編」編集会議について

蓬左文庫では、「名古屋叢書（正編）」「名古屋叢書続編」に続く尾張関係資料集として、昭和56年から「名古屋叢書三編」20巻（付・索引1巻）を刊行しており、既に6冊の本を世に送り出しています。この「名古屋叢書三編」を支えているのは、8人の編集委員によって構成される編集会議ですが、今回は、去る6月15日蓬左文庫において開催された第10回編集会議の模様をお知らせします。

はじめに、編集委員の構成メンバーをご紹介します。昭和55年、監修者として市橋鐸氏、佐々木隆美氏、所三男氏の3名、また編集者として芥子川律治氏、小島広次氏、杉浦豊治氏、野田千平氏、林董一氏の5名、合計8名のメンバーで発足した編集委員は、昨年9月の市橋氏の死去に伴い、監修者を1名減じ、新たに元蓬左文庫調査研究員の織茂三郎氏を編集者に迎えることになりました。新しい編集委員の顔ぶれは次の通りです。

〈監修〉

佐々木隆美 名古屋大学名誉教授 美術史
所 三男 徳川林政史研究所名誉所長 歴史

〈編集〉

芥子川律治 名古屋市文化財調査委員 民俗
小島 広次 名古屋市立短期大学教授 歴史
杉浦 豊治 金城学院大学教授 漢学
野田 千平 同 国文学
林 董一 愛知学院大学教授 歴史

○

織茂 三郎 元名古屋市蓬左文庫調査研究員 歴史

(50音順 敬称略)

さて、第10回を迎えた今回の編集会議は、小島・織茂両氏が、各々大学公務あるいはご病気のため欠席さ



左から順に、野田、杉浦、芥子川、林各編集委員と
久住蓬左文庫長、水野蓬左文庫調査研究員

れたものの、林氏の力作である第6回配本「士林浜廻続編」が刊行されたばかりということで、最初から熱っぽい雰囲気ではじめられました。まず初めに、林氏から「士林浜廻続編」の編集・印刷を通しての御苦心が語られましたが、そこには学術書を出版する研究者としての良心と熱意とがうかがわれました。他の委員からも、「士林浜廻続編」という資料自体の価値は無論のこと、林氏の解説のみを取り上げても、立派な学術論文に相当するという意見が続出しました。続いて第7回配本「松涛棹筆（抄）上」（編集担当小島氏、現在印刷中）の進捗状況の説明の後、第8回配本「楽寿筆叢・続楽寿筆叢・十如是独言」の編集担当者杉浦氏より書目内容とその資料的価値についての説明がありました。

河村秀穎の手になるこの三書目の編集を終えられたばかりの杉浦氏は、和漢の学殖を縦横に展開する秀穎の学識と、その学問の集大成である「楽寿筆叢」について語り尽きることなく、今後の配本が待たれるところ

です。次に、織茂氏が編集者に加わったことに伴う、歴史関係資料の編集分担の再検討と、未決定のまま保留されていた収録書目の決定について論議が交わされました。その結果、歴史関係資料の編集分担については、従来2巻分が予定されていた尾張分限帳が1巻分となり、その代りに私撰の尾張藩通史として評価される「尾藩世記」（阿部直輔編）が収録されることになりました。担当は林氏です。また、第14巻「金明録」については、同書の異本である「猿猴庵日記」を多年手がけてきた織茂氏が編集を担当されることになりました。さらに、収録書目未定のまま保留となっていた第5巻「蓬左遷府記稿」には、同じく松平君山の手になる「巡河日課」を、第20巻「木曾採薬記」には、舎人重巨著の「草木性譜」「有毒草木図説」を配することが了承されました。

以上のように、第10回編集会議の模様をかいつまんでご覧いただきましたが、「名古屋叢書三編」に対する編集委員の先生方の学問的情熱を、少しでも汲みとっていただければと思います。今後も、読者の皆様の温かいご支援と厳しいご叱正の言葉をお待ちしています。

出版物一覧

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S .50年刊)	3,500円	名古屋叢書三編第12巻(S .56年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S .51年刊)	4,000円	同 第8巻(S .57年刊)	3,000円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(同)	2,500円	同 第16巻(同)	3,000円
尾崎久弥コレクション目録第一～三集		同 第19巻(同)	3,000円
(S .52～55年刊)	各 1,500円	同 第17巻	
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S .53年刊)	2,000円	一横井也有全集 中一(S .58年刊)	3,000円
名古屋叢書続編 索引(S .47年刊)	700円	同 第4巻	
名古屋叢書続編総目録(S .44年刊)	400円	一士林浜洞続編一 (S .59年刊)	3,000円
善本解題図録第一～三集(S .55年再版)	各 300円	同 9巻	
日本の古典<蓬左文庫図録>(S .52年刊)	200円	一松濤棹筆(抄)上(近 刊)	3,000円
蓬左文庫・源氏物語図録(S .53年刊)	300円	堀田文庫蔵書目録(S .58年刊)	500円
蓬左文庫所蔵古地図複製(S 55～57年刊)		蓬左文庫図録(同)	1,500円
No.1～No.11	各 1,800円	蓬左文庫絵葉書<8枚組>(同)	300円
		御本印型書鎮(同)	1,000円

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

利用ご案内

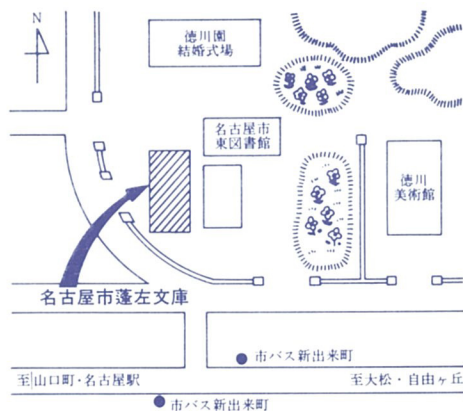
- ▷開館時間 午前9時30分～午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)
- 祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
月曜 " 月・火休館
- 年末年始(12月28日～1月4日)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません
- (閲覧料) 普通図書 無料
- 重要図書 有料(1部350円)
- ▷展示 随時蔵書の一部を展示
- (特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 普通図書のうち、保存上影響のないものについて複写サービスを行います。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受け付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935-2173

(市バス 新出来町 北 100m)
山口町 東 500m)



「蓬左」第19号 ☆昭和59年7月21日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)